

資質・能力、感性を育てる創造的な学習開発

—アート作品（伊藤若冲）の解釈・考察と批評を例に—

佐藤 洋一* 左近 妙子**

*名古屋学芸大学ヒューマンケア学部

**愛知県名古屋市立苗代小学校

Creative Learning Development that Nurtures Qualities, Abilities, and Sensibilities
-Example of Interpretation, Consideration, and Criticism of an Art Work (Ito Jakuchu)-

Yoichi SATO*, Taeko SAKON **

*Nagoya University of Arts and Sciences, Human Care Studies, Nissin 470-0196, Japan

** Naeshiro Primary School, nagoya 463-0046, Japan

要 約

教育再生実行会議第十二次提言で「一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せの実現」（Well-beingの明確化）と「学習者主体」の教育を軸とした方策が提示された。学校教育での Well-being の理念につながる系統的・構造的な資質・能力の育成は重要な実践課題である。一方、学習者の教育課題として「複数の多様な情報・テキストを比較的確に読解」する力や「ある観点や課題意識から批評的に分析解釈、考察し評価」する力、「論理的に効果や説得力、条件等を考慮し考えを論述」する力の不十分さが指摘されてきている（PISA 2018調査）。幸福のための価値を創造できる教育方法開発のためには、正解の把握や抜き出しだけではなく、解の無い課題に挑み「自分の考え（解釈や考察・批評）」を持ち創造的・批評的に、効果的に発信できる資質・能力、クリティカルシンキング、感性や探究性を育てることが必要となる。

本稿は、美術・国語科学習における鑑賞学習の課題を踏まえ、伊藤若冲のアート作品の解釈・考察から批評までを段階的に扱い、アートに触れた時の感動や発見を論理的に分析・批評することを通して国語科や美術科学習での資質・能力を伸ばし、感性や創造性・探究的態度を育てる学習開発を提案した。

Keywords: Well-being 資質・能力 伊藤若冲 学習開発

I Well-being と資質・能力の育成

1 学校教育における Well-being の理念

2021年6月・教育再生実行会議第十二次提言（注1）において「一人一人の多様な幸せと社会全体の幸せの実現」（Well-beingの明確化）と、あらためて「学習者主体の教育に転換」することを軸とした様々な方策が提示された（下線は佐藤・左近による、以下同じ）。学校教育での Well-being の理念につながる系統的な資質・能力、感性や創造性、クリティカルシンキング等の育成は急務とすることができる（注2）。

一方、PISA 2018調査では日本の学習者の今後の教育課題として「複数の多様な情報・テキストを比較的確に読解」する力や「示された観点や自らの課題意識から批評的に分析解釈、考察し評価」する力、「論理的に効果や説得力、条件等を考慮し考えを論述」する力が十分でないことが挙げられている（注3）。

このような視点、教育課題に対応した学習・カリキ

ュラム開発は管見の範囲ではほとんどみることができないようである（注4）。本稿は美術科・アート作品の学習開発を例に、アートに触れたときの感動や発見を論理的に分析・批評することを通して国語科や美術科の資質・能力を伸ばし、さらには感性や創造性を育てる探究的な学習開発を提案するものである。

2 新たな価値を創造する学びの構築へ

—美術科・アート作品の学習開発を例に—

美術科（絵画鑑賞・批評や評価）や国語科（美術評論）の学習でアートを論理的・批評的に読み解き「自分の言葉で」表現したり、アーティストの生き方やアートの豊かな発想を自分の生き方や発想に生かしたりといったアートの意義や本質（「見方・考え方」を働かす）と関連させた実践研究や学習開発等は依然として少ないと言わざるを得ない。

資質・能力型の教育では各教科の学びを踏まえ、様々な変化に対応し粘り強く調整し新たな価値を創造

すること、責任ある行動でWell-beingを実現することが目標となる。そのためにはキーワードや概念の暗記、正解の把握と回答だけではなく、創造的で価値ある考えの形成と発信する力を育てる必要がある。

本提案でもアート作品の背景やアーティストの生涯を知り教養や正解を見つけて答えたりすることが目標ではない。自分の内側にある興味・関心をスタートに、思いを巡らせアート作品や仲間と対話して解釈・分析し、さらに時代の常識的な価値観や作者の立場・背景を踏まえて批評することで、自分らしい新しい意味や価値を創り出すことを目指している（注5）。

II 美術科鑑賞、国語科アート教材の実態と課題

これまで小中学校の図工・美術科の授業研究会に参加する機会や大学・教職大学院で美術専攻の教員を指導する機会があった（佐藤・左近）。美術科授業を参観すると作品鑑賞をめぐる生徒同士が説明、質疑、交流等する場面が多かったが「深い学び」には至りにくいという現状があった。その理由の一つは自分の解釈や考えを論理的に説明する力が身に付いていないことや美術科特有の「見方・考え方」を意識している生徒とそうでない生徒の差が大きく、結果的に鑑賞・批評の質的内容の深まりに欠ける点に課題があった。

学習指導要領でも鑑賞学習は「人類のみが成しうる『美の創造』というすばらしさを感じ取り味わい、自らの人生や生活を潤し豊かにしていく主体的で創造的な学習」と位置付けられ、「受け継がれてきたものを鑑賞することにより、その国や時代に生きた人々の美意識や創造的な精神などを直接感じ取ることができる」とその意義について示されている。また鑑賞で育てる資質・能力の一つは「柔軟で鋭敏な感受性や美的判断力」（注6）であると明記されている。

国語科でもアートを扱った教材が見られ、現行の国語科教科書に「君は『最後の晩餐』を知っているか」（中2光村図書）、「鳥獣戯画を読む」（小6光村図書）等、筆者の感性・感覚から名画の独自の見方や価値観・評価が示された評論・鑑賞教材がある。しかし、これ等の特質や「見方・考え方」が生かされた教科横断的なカリキュラム開発やWell-Beingの理念につながる系統的な資質・能力育成等は十分とは言えない。

III 感性を育てる創造的・批評的な鑑賞学習の提案

1 創造的な学習を可能にするカリキュラム開発

子どもの豊かな学びを保証するためには、既習の学習内容を生かしつつ教科横断的な視点をもち、複数教科の学習を意図的に組み合わせることでより効果的に学習を進める視点が必要である。こうした、学習指導要領等の理念を実現するための方策として「カリキュラム・マネジメントの重要性」明示されながら各教科固有の学びの意義と到達目標等の関係や、学校教育全体

の教育課程論において「要」とされている国語科の教科としての位置付けが曖昧になっている。

本稿で鑑賞教材として扱うアート作品の「動植綵絵」とアーティストの若冲について、美術科固有の資質・能力を身に付けるだけでなく、国語科のエッセイや伝記という多様なテキストの精査・解釈の仕方、論理的な批評文の書き方及び社会科の社会的事象の地理的・歴史的な見方・考え方を身に付けることを目標に、各教科を横断したカリキュラム開発を行う。

2 パフォーマンス課題の設定と「批評」の意義

本単元では「アート批評を書くこと」をパフォーマンス課題として設定した。アート批評を書く学習は、習得段階で学んだ作品の色彩・形状・造形・アーティストの思い等の視点が、個々の生徒の感性や着眼点や課題意識等と結び付く発展的な段階の学習である。

「美術や美術文化に対する見方や感じ方」を深める鑑賞学習のベースとなるのが、情報を収集し、編集したり批評したり等して自分の考えを論理的に書く資質・能力である（注6）。アート批評を書く活動を設定することで、日本の子どもたちに欠けていると言われている「批評する力」を育成することにつながる。

現行の学習指導要領から、国語科で「批評」の言語活動例が示され「批評するとは、対象とする事柄について、そのものの特性や価値等について、根拠をもって論じたり評価したりすること（注6）」と明示されている。本来、批評とは対象に関心をもって関わったり、協働して創り上げていったりする創造的な行為である。批評・評価力を身に付けることで、物事や人間関係・情報等をより深く理解したり、自分らしい考え方や生き方を考えたりすることにもつながる。

3 ICT活用と複数のテキストの精査・解釈

本来なら実物を鑑賞することが理想であるが、それができないため、アート作品を鑑賞する際に一人一台のタブレット端末によって複数の絵の中から生徒が批評したい絵を自由に見て選択・決定したり、高画質のアート作品をデータとして取り込み、タブレット端末で見たい部分を拡大してディテールを詳細に見ることができるようにしたりしてICTを活用する。

後述するが本提案で扱う若冲の「動植綵絵」は花鳥図を独自に進化（深化）させた繊細な描写に特徴がある。タブレット端末に取り込むことで緻密に筆を運んだ跡等の細部を見られるという点では、ある意味、実際の作品を鑑賞する以上に新たな発見がある。

4 構成・表現形式の評価と自分の考えの形成・深化

小中・高校国語科では、一貫して「創造的・論理的」言語力を高める「構成・表現形式を評価する力」や「考えを形成し深める力」が重視されている（注4・6）。特に「構成・表現形式を評価する力」は、論理的で批評的・創造的な言語能力育成にも深く関わる。具体的には、目的・役割・機能に応じた様々な文章形式・テキストを読み解き、自分

の考えを形成して、その考えを説得力をもって書いたり、効果的に伝達したりする力であり、そのために到達目標に対応した振り返りの新たな視点の再構築が必要となる。

本提案では、資料1に示すような段階的に学びを振り返る「アート鑑賞・批評の自己評価カード」を開発・使用する。パフォーマンスの質を評価する尺度として全段階でB基準を示し、すべての生徒が達成を目指す目標とする。B基準を超えて達成できた場合はAとし、B基準を達成できなかった場合はCとして、評価の根拠を記述する。このように生徒が学んだことをメタ認知するとともに、新たな発想や認識・価値観の形成に生かす方法を示す。

Ⅲ なぜ「伊藤若冲」の絵画を扱うのか

1 国宝に指定された「動植綵絵」の魅力

本単元で、伊藤若冲の「動植綵絵」を扱う一番目の理由は本物（国宝の絵画）と出会あわせる意義である。

日本美術界で人気が高い絵師の一人である伊藤若冲の最高傑作「動植綵絵」30幅が令和3年に国宝に指定された。「動植綵絵」は若冲が1758年頃から約10年間かけて完成させた花鳥画30幅の連作であり、若冲自身が「釈迦三尊像」3幅とともに家族と自分の永代供養を願って相国寺に寄進した。「動植綵絵」と命名したのは若冲自身とされており、仏教の「草木国土悉皆成仏」の思想を体現すべく生きとし生けるすべての生命を慈しむ精神を表現したと言われている。

明治時代に入り廃仏毀釈のため困窮した相国寺は明治22年「動植綵絵」30幅を皇室に献上。その際の下賜金によって相国寺の寺域は免れ、また「動植綵絵」も散逸を免れるとともに非常に良い状態で後世に作品が残されることとなった。

「動植綵絵」の相国寺寄進により若冲の名声は高まり、『平安人物志』（注7）に名前が掲載されるほど著名な絵師となったものの、以降200年間日本美術史の表舞台から姿を消す。生前の若冲が「聴くならく、君他日名区に蔵め。以て千載、具現の徒を俟つと」（注8）と、自分の作品が理解されるまでに1000年の時を待つと言っているが、若冲が再び注目されるようになったのは20世紀末のことである。長い間忘れられた若冲がなぜ現代において爆発的な人気を博し、国宝に指定されるまでに至ったのか。こうした謎のある経緯は中学生にとって非常に魅力がある。

2 若冲畢生の大作「動植綵絵」の価値（注9）

若冲を扱う二番目の理由としては、若冲絵画の集大成とも言える「動植綵絵」30幅のディテールを描き込んだ絵画としての圧倒的な存在感と多彩さである。一人一台端末を有効に活用し、作品を拡大して詳細に見ることで以下のような魅力の発見が期待される。

(1) 描き込まれたディテール

ディテールへのこだわりにはアーティストの独特なモチベーションが潜んでいる。若冲の絵は画面の

隅々まで意識がいきわたっており、細い一本の線も手を抜かず、圧倒的なパワーで緻密に描き込まれている。

(2) 独特の色彩感覚

鮮やかで凝った色づかいは若冲の絵を特徴づける重要な要素である。特に視覚効果まで計算された補色関係の色彩配置は絵を見る人に強い印象を与えている。

(3) グラフィカルな形状・形態感覚

若冲の絵の本質は、独自の形態感覚にあると言われている。写実と幻想・幻視がミックスした斬新なデザインと眼差しは、同時代の新しいアートを追求したアーティストの追従を許さない独自性がある。

(4) 多視点をもつ構図

絵の構図・視点には若冲がイメージした自然観・生命観が強く表れている。上から見たり下から見たり、左右から見たりした対象が同時に描かれ、多視点であるからこそその独自で不思議な空間が構成されている。

(5) 「裏彩色」という技巧・最新の絵の具

「動植綵絵」には若冲の多様な技巧が駆使されているが、最も使われている技巧が「裏彩色」である。絵の裏側の絹地に計算して色を重ねることで、絵を立体的にしたり輝かせたりといった効果を出している。

また、より美しい色を追求して高価な画材が選ばれ、特にプルシアンブルー等海外で発明されたばかりの最新絵の具が使用されていることにも特徴がある。

3 伊藤若冲という人物、その生き方の魅力

三点目の理由は若冲の人柄と生き方の魅力の価値である。伊藤若冲は1716年、京都の錦小路中魚屋町の青物問屋「樹屋」の長男として誕生する。主人は代々源左衛門を名乗り、若冲は4代目樹屋源左衛門として青物問屋の仕事をしていた。若冲が本格的に絵を描き始めたのは30歳代前半あたりからと考えられているが、その後わずか数年のうちに上達、40歳で家督を次弟に譲り画事に専念する。その契機となったのが、相国寺の禅僧で詩人の大典（梅莊頭常1719-1801）との出会いと親交であると言われている。

若冲が生前に相国寺に建てた墓の「若冲居士寿蔵の碣銘」は大典が記したものであり、現在の若冲伝記の基本資料となっている。大典は若冲に相国寺が所有する絵を若冲に見せる等様々な美術の動向に触れさせたり、無名であった若冲到鹿苑寺大書院障壁画の仕事に依頼したり、ともに淀川下りをしてコラボレーションにより作品を制作したりするを通して若冲の才能を開花させ、一流のアーティストにのし上げていく。こうしたキーパーソンとの出会いと交流に大きな影響を受け、人生の方向性がクリアになっていく過程は、生徒にとっても興味深いものであるだろう。

また、1771年末から錦高倉市場が未曾有の危機にさらされた際に問屋を引退して画業に専念していた若冲は足掛け4年間もの間、対策を協議したり青物を売る村々に足を運んだりして交渉のリーダーとしてネ

ゴシエーション役を担う。その間の作品はほとんどない。若沖は自分の芸術の完成だけを考え、社会に背を向けて生きていくような画家ではなかったのである。

ここから、若沖の稀代の芸術家としての一面だけでなく、人生のすべてを掛けていた画業を止めてまでも、人々のために自らの役割を果たすことを優先した生き様を伺い知ることができる（Well-Being の理念にもつながる）。こうした若沖の生き方には、キャリア学習を行い自分の人生について考え始めた中学生も共感を抱くと考えられる。

IV 分析・解釈と批評を核に、創造的な学習の展開へ

1 単元名「若沖」を読み解きアート批評を書こう！

2 単元の展開（10時間完了）（注10）

(1) 導入・じっくりと絵を見て、話し合う（1時間）

導入では教師がファシリテーターとなり、伊藤若沖「動植綵絵」の2作品「老松白鳳図」「雪中錦鶏図」を見て感じたことや考えたこと等を自分の言葉で表現・ディスカッションをする。2作品としたのは比較により若沖作品の共通点や相違点が鮮明で立体的になるからである。一人一人の考えを傾聴し、多様な考えを認め合い質問したり話し合ったりする。

次に、パフォーマンス課題「アート批評を書こう！」を伝え、アート批評のモデル文を提示する。本提案ではすべての段階で全員が達成を目指す目標としてB基準を示すが、B基準を超えたA基準のモデルを生徒に提示し、一人一人が高い目標をもてるようにする。

(2) 習得1ーアートそのものを読み解く（2時間）

まず「自己評価カード」（資料1）を配付し目標と一体化した評価項目と評価の方法を示す。パフォーマンスの質を評価する尺度として全段階でB基準を示し、B基準を超えて達成できた場合はA、B基準を達成できなかった場合はCとしてその評価の根拠を記述するという方法について、生徒にモデルを示し説明する。

次にアートを読み解く5視点「形」「色彩・光」「材料・技法」「構成」「主題・価値」の項目と習得・達成すべきB基準を伝え、「アートを読み解くシート」（資料2）とモデルを配付する。事前に生徒用タブレットに画素の高い「動植綵絵」30幅すべてを見られるようにしておく。生徒はその中から気に入った1作品を選び、タブレット端末で拡大してディテールもよく見ながら「アートを読み解くシート」を記述する。

(3) 習得2ーアートの背景を読み解く（2時間）

今回の単元のゴールである「アート批評を書く」ことの目的は、作品の特性や価値等について根拠をもって論じたり、社会的歴史的な文脈に位置付けて評価したりすることにある。アートが既存の枠を超えて常識に挑んだアーティストの記録であることを踏まえ、作品鑑賞・分析だけでなくアーティストの生きた時代や生涯を知ることが批評する上では必要不可欠である。

そこで生徒に「若沖にまつわる31のデータ集」（タ

イトルー覧は資料3）を配付する。このデータ集は若沖に関わって選んだ31の年表、地図、エピソード、作品の解説等多様なテキストを掲載した冊子である。

本単元に入る前に若沖に関する主要文献を生徒が手に取れるようにしておき、若沖の情報が掲載されている信用できるインターネットのサイトは閲覧できるようにしておく。それでもすべての生徒がアート批評を書くところまで行き着く前の、情報収集の段階で膨大な時間が必要となる。そのため文献やサイト以外にも厳選した31のデータを冊子で渡し、自分の視点から必要なデータを選択して活用することとする。

次に「アートの背景を読み解くシート」（資料4）とモデル文を配付する。ここではすべての項目について記述することがねらいではなく、同時代の出来事や絵画技術、流行から作品の価値を見出すことが目的である。ある程度個別でデータを読み取り自分の考えをもったら、グループで互いの考えを伝え合い話し合いながら、自分が見出した作品の価値とは違う価値を見付けたり、自分の考えを深めたりしていくようにする。

(4) 習得3ーアーティストの人生を読み解く（2時間）

アート作品には作家が生きた軌跡が反映されており人生と関連づけることで作品の意味や作品制作の動機が読み解ける。また、アーティストが時代の価値観とどう向き合い生きてきたのかという視点をもつことで、生徒は自分らしく信念をもって生きることにも気付くことができる（Well-beingの模索と探究）。

「アーティストの生き方を読み解くシート」（資料5・資料6）とモデルを配付し、「プロフィール型」か「ストーリー型」のどちらかを選択して「若沖データ集」を参考にし若沖の人生についての情報を整理する。特に、どんな出会いがあったか、どんな試練があり乗り越えたか等代表的なエピソードを選んでまとめることで、アーティストの情熱や信念・使命、やり抜く力（グリット）、作品の価値がより明確になる。

(4) 活用1ー生き方や作品の特徴をつかむ（1時間）

アート批評を書く前のステップとして「若沖データ集」からデータを選び、そこからアーティストの生き方や作品の特徴について共通のルールを抽出して自分の主張を導き出す段階を設定する。物事を系統的・体系的に整理し、因果関係を構造的に把握する論理的思考は、次の段階のアート批評を書く学習だけでなく、すべての生徒に必要な思考法である。

「『アート批評』を書こう！データから共通点をつかむー」（資料7）のプリントを配付。2つのデータを選び共通点を抽出するか、逆に作品の特徴や生き方を先に決めて根拠となるデータを2つ選び出すか、どちらかのパターンで記述する。その後、導き出した作品の特徴や生き方について意見を交流する。

(5) 活用2ーアート批評を書く（2時間）

パフォーマンス課題として位置付けた「アート批評

を書く」段階である。学習シート「アート批評を書く」(資料8)とモデルを配付。アート批評のテキスト形式の特徴の一つである、冒頭やタイトルで自分の見解を示し、「なか」の発見と解釈の部分でそう判断した根拠を述べることを伝える。これまで導入・習得・活用段階で使用した学習シートを参考に、論理的な文章構成でアート批評を記述し、発表・批評し合う。

V Well-Being とカリキュラム・マネジメント

1 各教科を学ぶ価値・意義と「深い学び」

現行の学習指導要領では「育成を目指す資質・能力の明確化」と「各教科を学ぶ価値・意義」が重視され、「教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方(見方・考え方)」を働かせる教育が「各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」であり、「教科等の学習と社会をつなぐ」深い学びの鍵と明記されている。

(注4・6)しかし、教科を学ぶ本質的な価値・意義や各教科の見方・考え方の解釈の狭さ、見方・考え方を「働かす」とは何をどうすることが不明確であり、結果として資質・能力育成の立場からの教材研究や評価観がなされず「教科等の学習と社会をつなぐ」「深い学び」には至っていないという現状がある。

「深い学び」へのアプローチと評価のためには教科・教材の本質を構成する「テキスト情報内容」(学問的な本質、魅力と背景)と「テキスト情報形式」(学問領域の方法論、戦略やスキル)の2つの側面に着目し抽出することが効果的である(注3・5)。本稿ではアーティストの情報として、年表や地図、伝記、エッセイ等複数の多様なテキスト内容(情報)・テキスト形式を比較・読解、解釈、選択して活用している。

2 創造的・批評的(探究的)な学びをどう創るか

これからの社会では、社会全体のため、自分のために新たな価値を創造する(Well-beingの実現)が重要になる。そのためには正解を見付け答えたり抜き出すだけではなく、「自分の考え(解釈や考察・批評)」を持ち創造的・批評的に構成し、効果的に発信できる資質・能力を育てることが必要である。

本稿は、これまでの美術・国語科学習における鑑賞学習の課題を踏まえ、伊藤若冲のアート作品の解釈・考察から批評までを段階的に行うことで国語科や美術科で育てる資質・能力を身に付け感性を育てる創造的・批評的な学習開発を提案した。開発教材や全学習シート等の詳細な考察等については別稿を期したい。

〈付記〉資料2・4における伊藤若冲「老松白鳳図」

「雪中錦鶏図」は宮内庁三の丸尚蔵館所蔵である。また、本稿での「複写転載」については「当該掲載物以外には使用しない」「加工、改変をしない」「(掲載時は)当館に一部納入すること」等の使用条件とともに宮内庁長官官房用度課の承認を受けている

(令和4年11月9日付け、整理番号4-74-2)。

〈注記・主要参考文献〉

- 1 「ポストコロナ期における新たな学びの在り方について」(政府「教育再生実行会議第十二次提言」2021年6月、座長=鎌田薫早稲田大学前総長)
- 2 前野隆司・前野マドカ著『ウェルビーイング(日経文庫)』(日本経済新聞出版2022年)。
- 3 佐藤洋一・加藤洋佑「多様なテキストを批評しWell-beingの実現につなげる教育」(名古屋学芸大学研究紀要 教養・学際編第18号2022年)、同「創造的な『課題発見・解決能力』を育てる探究型国語科学習」(同紀要 第16号2020年)等。
- 4・6『中学校学習指導要領解説 総則編』第1章、『同学習指導要領解説 国語編』『同学習指導要領解説 美術編』等(文科省2018年)等。
- 5 左近妙子「学校にルーツをもつ偉人をモデルに、自分らしい生き方を探究する総合的な学習の時間」(「楽しく深い学び」を創る国語科授業研究会紀要第4号2021年)、佐藤洋一・左近妙子「資質・能力を育てる多様なテキスト形式、『考えの形成と深化』」(愛知教育大学教職キャリアセンター紀要3号2018年)、同「資質・能力を育てる国語科カリキュラム・マネジメント」(名古屋学芸大学研究紀要 教養・学際編第15号2019年)等。
- 7 近世京都の市井の文化人を集成した人名録。明和5年(1768年)の第1版より慶応3年(1867年)の第9版まで増補改訂された。若冲は「平安人物志」に画家として登録されている。
- 8 「丹青歌寄若冲山人」『大橋集』(東京都立中央図書館加賀文庫本・寛政12年1800年刊)
- 9 佐藤康宏著『若冲伝』(三松堂2019年)、同『もっと知りたい伊藤若冲改訂版』(東京美術2011年)、辻惟雄著『新版 奇想の系譜』(小学館2019年)、同『若冲』(講談社学術文庫2015年)、辻惟雄・太田彩監修『若冲原寸美術館』(小学館2016年)、狩野博幸監修・京都国立博物館編『伊藤若冲大全』(小学館2002年)、狩野博幸『若冲』(角川文庫2010年)、澁澤龍彦他著『若冲』(河出文庫2016年)等。
- 10 フィリップ・ヤノウィン他著『学力をのばす美術鑑賞ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』(淡交社2015年)、新関伸也他編著『ループリックで代わる美術鑑賞学習』(三元者2020年)、杉原賢彦他著『アートを書く!クリティカル文章術』(フィルムアート社2006年)等。

資料1 自己評価カード

- 1 アート鑑賞・批評の自己評価カードは、B基準を示して生徒と教師で評価指針を共有するものとして作成した。
- 2 このカードをA4の厚紙の両面で印刷し、習得段階のはじめに配付する。生徒に目標と一体化した評価項目と評価の方法を示すことに意味がある。
- 3 パフォーマンスの質を評価する尺度として全段階でB基準を示し、すべての生徒が達成を目指す目標とする。B基準を超えて達成できた場合はAとし、B基準を達成できなかった場合はCとして、その評価の根拠を記述する。
- 4 パフォーマンス評価においては、ルーブリックによる段階的な指針を示すことが一般的である。しかし生徒に多くの評価内容を示すと、どこを目指せばいいのかが曖昧になるという課題がある。そこで本単元では全員が達成を目指すB基準を示し、各段階において自身の成果や課題がどう達成できたか根拠をもとに言語化するという方法をとる。

【アート鑑賞・批評】自己評価カード ()組 ()モデル

(アートそのものを読み解く)

評価日	項目	B基準	評価	AorC評価の根拠
/	形	「形」のよさや美しさに気づき、「形」の表現の意図や工夫について、自分の言葉で表現している。	A	絵の中に多くの相似形があり、それが作品の面白さになっていることに気づけたから。
	色彩・光	「色彩」「光」のよさや美しさに気づき、「色彩」「光」の表現の意図や工夫について、自分の言葉で表現している。	B	
	材料・技法	「材料」や「技法」のよさに気づき、その特徴や工夫について、自分の言葉で表現している。	A	「真彩色」や若冲が使った特別な絵の具の効果に気づき、詳しく説明できたから。
	構成	「構成」のよさに気づき、その特徴や工夫について、自分の言葉で表現している。	B	
	主題・価値	作品から伝わる主題(テーマ)や美術的な価値についての自分の考えを表現している。	C	自分なりのテーマが考えられず、他の人の意見を参考にしていたから。

(アートの背景を読み解く)

評価日	項目	B基準	評価	AorC評価の根拠
/	歴史的位置づけ・技術・流行	作品が制作された時代の出来事やテクノロジー、アートの流行など、作品の背景からとらえた作品の価値について、自分の考えを表現している。	A	江戸時代後半の混乱しつつある世の中で、最高の作品を作るために挑戦し続ける若冲のすごさに気づいて、考えを表現できたから。

(アーティストの人生を読み解く)

評価日	項目	B基準	評価	AorC評価の根拠
/	人物の生い立ち・軌跡	表や図、写真、エピソードから、アーティストの生い立ちや軌跡について読み取り、必要な情報を抜き出してまとめている。	A	文章だけでなく、年表や地図などからも若冲の情報を読み取り、学習シートに分かりやすくまとめることができたから。
	人物の生き方・人柄	表や図、写真、エピソードから読み取って、アーティストの生き方や人柄についての自分の考えを表現している。	B	
	時代の価値観への挑戦	時代の常識的な価値観の中で、アーティストが何を思い、作品を制作したのかについての自分の考えを表現している。	A	若冲が、当時のアートの主流から外れ、自分らしい表現を追求するために孤独に戦っていたことを発見して書くことができたから。

(アート批評を書く)

評価日	項目	B基準	評価	AorC評価の根拠
/	タイトル	作品の特徴を捉えたタイトル、読者が興味をもつような印象的なタイトルを付けている。	A	若冲に関する印象的な言葉を引用したタイトルをつけることができたから。
	導入の記述	描かれている内容、作品の特徴を、読者の興味をひくように印象的に書いている。	B	
/	作品紹介	①作品タイトル②制作年③アーティスト④当時の状況⑤関係する人々など、批評する上で必要な情報を選んで書いている。	A	作品についての多くの情報の中から、必要な情報だけを選んで、簡潔にまとめることができたから。
	発見と解釈	作品のイメージ、形、色彩や光、構成、材料・技法、作品の背景やアーティストの生き方などの観点から自分が「発見」したことを書いている。	B	
	メッセージ	作品から伝わる主題(テーマ)や美術的な価値についての自分の考えを書いている。	C	自分の主張が、強りよがりになっているのではないかと思ったから。もっと勉強が必要。
	生き方・考え方の更新	作品分析・解釈や、アーティストの人柄、生き方、挑戦から感じたことを、自分の生き方や考え方に今後どう生かすかを考えて書いている。	B	
	校正	自分の考えが伝わる表現、読者の興味をひく表現になっているかを確かめて、批評文を直している。	A	読み直して、結論から先に書いた方が分かりやすいと思い、「導入」を書き直すことができたから。

(課題発見メモ) ※分かったこと、疑問に思ったこと、考えたこと、面白いと思ったことなどを箇条書きで書こう。

- 皆で2枚の絵を比べながら、感じたことや疑問に思ったことを伝え合う学習はとても楽しかった。
- 実際の絵が見たいなあと思ったけど、タブレットで絵を拡大することで、若冲の細部のすごさに気づけたのでそれはよかったと思う。
- 若冲について、複数のエピソードを比べて読むことで、若冲の人柄や生き方がだんだん明らかになった。
- 若冲は、なぜ、何のために、膨大な手間と時間のかかる「目描き」の技法を開発したのか疑問に思った。
- 若冲は晩年に「絵」から「像」、二次元から三次元の創作にいったが、それはなぜなのか知りたいと思う。
- 美術批評を書いたり、昔の美術批評を読んだりするのは面白かったけど、そもそも美術批評はどういう人が読むのかなあと疑問に思った。


資料2 アートを読み解くシート

- 1 アートを読み解く視点から、論理と感性でアート进行分析するシートである。
 - 2 アート作品を読み解く5視点、「形」「色彩・光」「材料・技法」「構成」「主題・価値」の項目を確認した後、右のモデル文とともに配付し、「動植綵絵」30作品の中から自分で選んだ作品を鑑賞して記述する。
- ※「老松白鳳図」(「動植綵絵」30幅の中の1幅)は、伊藤若冲作、宮内庁三の丸尚蔵館の収蔵品である。

アートを読み解くシート ()組 名前 ()モデル

【後Ver.】

作品のタイトル **老松白鳳図(動植綵絵)** アーティスト名 **若冲**



転載禁止

【三十幅のうち一 絹本着 縦142.3cm×横79.0cm】

作品を読み解く視点

【ばつと見て、どう感じた? 一作品の第一印象・イメージ】
 繊細で美しい羽根をもつ鳥だ。白い羽根がまるでレースのように透けていて、とてもきれいだ。

【作品の中に出てくるものや人の形は? 一作品の形】
 鳥が大きく羽根を広げている。動きのある羽根の先に、赤色と緑色の2色で描かれているハートの形が印象的。

【作品の中の色や光は? 一作品の色彩や光】
 中心にいる純白の鳥が、内側から光を放っているように描かれている。

【作品の中の人やものは、どう配置されている? 一作品の構成】
 夜のような暗い色の松が上下に配置され、中心から上の画面いっぱい、光り輝く白鳥が描かれている。画面右上には旭日、その下方には白鳳を見つめる鳥が描かれる。

【作品にはどんな材料や技法が使われている? 一作品の材料・技法】
 白鳳の羽根は、絹の裏側から羽根の部分に黄土色と胡粉を塗り、この黄土色が表に透けることで、厚みを増した表裏の白が映り、金色に見える効果を生み出している。

【ずばり、この作品のテーマや美術的な価値は何? 一作品の主題・価値】
 デイテール(細部)に若冲の個性が宿っている! デイテールの徹底的なこだわりと緻密さが勝利した作品!

資料3 「若沖にまつわる31のデータ集」タイトル一覧

- 1 若沖に関わって選んだ31の年表、地図、エピソード、作品の解説文の冊子を配付。右はそのタイトル・形式一覧である。
- 2 生徒がアート批評を書く段階に行き着く前の、情報収集の際に膨大な時間が必要となる。そこでデータを冊子で渡し、自分の視点から必要なデータを選択して活用してもよいこととする。

番号	データのタイトル	形式	備考
1	若冲年表	年表	1716年~1800年の年譜
2	若沖の生きた時代(日本)	年表等	1700年代の日本の年表
3	若沖の生きた時代(世界)	年表等	1700年代の世界の年表
4	若沖をめぐる京都	地図	京都の若沖の住まいや関連史跡
5	若沖の家族と同時代の文化人たち	家系図等	伊藤家系図と同時代の文化人表
6	狩野派の画法を学ぶ	エピソード	江戸時代の絵画の学び方
7	若沖という号の謎	エピソード	なぜ「若沖」という号が生まれたか
8	若沖と師・大興の絆	エピソード	当代随一の知識人、師の大興との絆
9	鶏を描く	エピソード	鶏を飼ひ、写生して鶏を磨く
10	若沖が唯一描いた人物、売茶翁	エピソード	異色の権僧、売茶翁からの影響
11	雀を放つ	エピソード	必争が若沖を訪問した逸話
12	若沖のライバル1・円山応挙	エピソード	市場の雀を買い取り、放つた逸話
13	若沖のライバル2・池大雅	エピソード	南宗画を学び独自の南画を展開
14	若沖のライバル3・曾我蕭白	エピソード	奇矯な行動と奔放な進取画で有名
15	屈折する画面——鹿苑寺大書院	エピソード	金蘭の葡萄園や竹園の水墨画を描く
16	素直好き	エピソード	肉を好まず、素直が好きだった逸話
17	淀川下り	エピソード	大興と淀川下りで詩と水墨画コラボ
18	市場をめぐる騒動	エピソード	若年寄として錦市場存続のため活躍
19	若沖の挑戦——「目黒描き」の技法	エピソード	若沖が発明したモザイク画の技法
20	絵一枚、米一斗	エピソード	隠居僧の暮らしと旺盛な創作欲
21	若沖を継ぐ者	エピソード	若沖工房で働く弟子たち
22	若沖を観る1 写真とデザインとの融合	解説文	デザイン的要素を入れた斬新な形状
23	若沖を観る2 色彩と墨打ちの秘密	解説文	様々な技法で立体的に描き出す
24	若沖を観る3 水墨画・版画の冒険	解説文	大胆で無造作なタッチで新境地
25	若沖を観る4 若沖の隠し紙	解説文	画中に隠される相似形の秘密
26	若沖を観る5 石峯寺の石像群	解説文	二次元から三次元への移行
27	梅原孫(伊藤若沖)	エッセイ	若沖の「鶏」が象徴するもの
28	吉井勇「若沖複製抄」	エッセイ	石峯寺の羅漢像を訪ねて
29	遠澤龍彦「日本の装飾主義とマニエリスム」	エッセイ	藤原と若沖の作風の関係性
30	安岡享太郎「物について、日本美術の再発見」	エッセイ	若沖の「物」のとりえ方の独自性
31	瀬川弥太郎「若沖とサボテン」	エッセイ	日本で最初にサボテンを題材に

資料4 アートの背景を読み解くシート

- 1 アーティストと同時代の出来事や技術、アートの流行という視点から、作品の価値を見出すためのシートである。
 - 2 個別でデータを読み取った後、グループで考えを交流し、自分が見出した作品の価値以外の価値を見付けたり、考えを深めたりする。
- ※「雪中錦鶏図」(「動植綵絵」30幅の中の1幅)は、伊藤若沖作、宮内庁三の丸尚蔵館の収蔵品である。

アートの背景を読み解くシート

() 組 名前 () モデル

作品のタイトル **雪中錦鶏図 (動植綵絵)** アーティスト名 **若沖**



背景から分かる作品の価値

江戸中期、狩野派の傑作「図」が定まる中、若沖をはじめとする京都の絵師たちは、これまでの絵の常識だった狩野派の絵を破って、個性的な表現を追求した。若沖は、一見写実的であるが、実はそうではなく、現実と幻想がミックスされた作品を生み出す。「雪中錦鶏図」では、トロンと動き出す生き物のような雪を描き、これまで誰も見たことのない世界を創造した。

作品の時代

【作品の制作年】
1761年~1765年頃

【作品が制作されたころの、アーティストの国の主な出来事】

- 1760年 徳川家治が十代将軍となる
- 1767年 田沼意次が側用人となる
- 1768年 上田秋成『雨月物語』刊行

【作品が制作されたころの、世界の主な出来事】

- 1762年 ルソー『社会契約論』刊行
- 1769年 ワットが実用的な蒸気機関を発明

【作品が制作された時代のテクノロジー】

- 1760年代に世界産業革命がイギリスで始まる
- 1774年 杉田玄白と前野良沢『解体新書』刊行

【作品が制作されたころのアートの流行】

- 江戸時代、絵画を学ぶ者は狩野派の画塾に入門し、絵手本を写す練習から始めるのが普通だった。
- 上方では、若沖、語白、大雅、蕭村、応挙、蓬雪が次々と新しい試みをはじめ。江戸では鈴木青丘が錦絵を創始。歌麿や北斎に至る浮世絵師が登場し人気を集めた。

資料5 アーティストの生き方を読み解くシート (プロフィール)

- 1 アーティストの基本データと併せて、アーティストの代表的なエピソードを抽出して生き方を読み解くプロフィール型のシートである。
- 2 「若沖データ集」を参考にしながら若沖の人生について必要な情報を整理してまとめる。アーティストを象徴するエピソードを選択して自分の言葉で表現することで、アーティストの使命や作品の価値をより明確にする。

アーティストの生き方を読み解くシート (プロフィール編)

() 組 名前 () モデル

アーティスト名 **若沖 (じゃくちゆう)**

人物

【家族】
父(伊藤宗清)、母(清寿)、弟3人、妹1人

【師匠・仲間・ライバル】
《師匠・仲間》
大典(相国寺第113代住持)
売茶翁(元黄檗僧)

《ライバル》
池大雅、円山応挙

【後援者・顧客】
《後援者》
伊藤宗藏(弟・柳屋源左衛門当主)

《顧客》
京都内外に多数の顧客がいた

【代表作】

- 動植綵絵(1758年~)
- 葡萄小禽図(鹿苑寺大書院障壁画1759年)

若沖居士像を掲載

【本名・国籍】
名は汝約、字は景和・日本

【生誕年・場所】
1716年3月1日 京都

【死没年・場所】
1800年10月27日 京都

エピソード

【人柄・生き方が分かるエピソード1】

《市場をめぐる騒動》

若沖の生家は京都の橋本魚肉物市場の側屋「例屋」であり、若沖も40歳で弟に家業を継ぐまで家業を継いでいる。若沖が引退した後の1771年頃から、錦市場の存続を巡って騒動が起きる。この時年高だった若沖は、いろいろな場所へ足を運んで交渉したり、対策を協議したりして尽力し、錦市場が公認されるに至る。この4年間に制作されたと思われる若沖の作品は1つもない。

【人柄・生き方が分かるエピソード2】

《1000年の時を待つ》

若沖は1760年頃、名作「動植綵絵」の半数に相当する15幅を描いたとき、大板の使者、川井桂山に「私は理解されるまでに、千年の時を待つ」という言葉を伝えている。この言葉は、桂山の奥書の中に「聞くならなく、若沖白名区に聞く。以て千載、経緯の時を待つ」と記録されている。また「芸術」という言葉さえない江戸時代の日本において、若沖はまるで近代アーティストのような発言をしている。

【2つのエピソードから分かるアーティストの人柄・生き方】

アーティストとして、社会人として、自分の生き方を、自己プロデュースした最初の日本人だったと言えるのではないかな。

資料6 アーティストの生き方を読み解くシート (ストーリー)

- 1 アーティストの生涯を「ストーリー」に見立てて読み解く学習シートである。
- 2 アーティストの人生の始まり、師匠・友人・ライバルとの出会い、人生を大きく転換させた事件や決断、人生の終わりについて分析することで、使命や作品の価値を明確にする。
- 3 「プロフィール型」「ストーリー型」それぞれの視点から分かったことを共有し、考えを広げたり深めたりする。

アーティストの生き方を読み解くシート (プロフィール編)

() 組 名前 () モデル

アーティスト名 若 沖 (じゃくちゆう)

若沖居士像を掲載

若沖は京都の御高倉青物市場の大問屋「例屋」の長男として生まれた。商人として命をなから、10代半ば頃には絵を学びはじめる。
若沖は40歳で次第に家業を譲ると、本格的に「自然」をモチーフにして絵を描くアーティストとしての人生をスタートする。

<アーティストとしての人生のスタート>

【生涯年・場所】
1716年3月1日 京都
【アーティストになったきっかけ】
若沖は京都の御高倉青物市場の大問屋「例屋」の長男として生まれた。商人として命をなから、10代半ば頃には絵を学びはじめる。
若沖は40歳で次第に家業を譲ると、本格的に「自然」をモチーフにして絵を描くアーティストとしての人生をスタートする。

<(人生の師匠)との出会い>

【名前】
大典
【どんな人?】
相国寺の禪僧で詩人。仏教、儒教、漢詩文などの分野にわり多岐の書籍がある。
【アーティストに与えた影響】
大典は若沖に相国寺に所有する絵を見せるなどして様々な美術の奥奥に連れさせたり、まだ無名であった若沖に應徳寺大徳院稲垣屋の住持を依頼したり、とくに奥山を下りしてコラレーン・ロンにより作品を制作したりすることを通して、アーティストとしての若沖の才能を開花させた。

<人生の終わり>とアーティストの使命・意義

【死没年・場所】
1800年10月27日 京都
【アーティストの使命・意義】
若沖は、当時の花鳥画の常識をくつがえし、超越的なテクニックと、高級な絵の具を窮尽に駆って、雄大な見たことのない独自の花鳥画の世界を創り出した。

<人生の試練>

【どんな試練か】
1788年の1月に京都の大半を焼き尽くした「天明の大火」で、若沖は家を失った。焼け残ったのは1790年には大病にかかる。その後、経済的にも打撃を受け、悠々自適の生活を送ることができなくなった。
【どう試練を乗り越えたか】
若沖は京都深草にある右衛門の門前にある家に寄りかか、絵一仕事をするの生活を始めます。しかし、絵画制作は死の年に至るまで盛んだった。若沖はアーティストとしての挑戦を続け試練を乗り越えた。

<代表作が生まれるまで>

【代表作】
動植物絵巻
【どのようにして代表作が生まれたか】
「動植物絵巻」30幅は、「新編三尊像」3幅とともに、家族と自分の永代供養を願って、葬である大典のいる相国寺に寄進するために制作された。
若沖が1758年頃から約10年間の歳月、40歳代のすべてをかけて完成させた花鳥画で、仏教の「生きとし生けるすべての命はみな仏である」という思想を絵画によって表現したと語られている。

資料7 「アート批評」を書こう! の学習シート1

- 1 パフォーマンス課題である「アート批評を書く」準備段階で使用される学習シートである。
- 2 右のモデルを配付し、若沖データ集の中からデータを2つ選び共通点を抽出するか、逆に作品の特徴や生き方を先に決めて根拠となるデータをデータ集の中から選び出すか、どちらかのパターンで記述する。
- 3 その後、導き出した作品の特徴やアーティストの生き方について意見を交流する。

「アート批評」を書こう! — データから共通点をつかむ! —

☆ 若沖データ①②③の中から二つのデータを選び、そこから若沖の生き方や、作品の特徴をつかもう。

例) 選んだデータは、⑮と⑲である。

二つのデータから二つを比較して共通点を探し出すか、逆に作品の特徴や生き方を先に決めて根拠となるデータをデータ集の中から選び出すか、どちらかのパターンで記述する。

選んだデータは、⑮と⑲である。

若沖は「餅日描き」という技法で、内閣を何重にも塗り重ねた「餅日描き」を何千、何万と描いてきた。同時に動物植物を描くという「餅日描き」を何千、何万と描いてきた。同時に動物植物を描くという「餅日描き」を何千、何万と描いてきた。同時に動物植物を描くという「餅日描き」を何千、何万と描いてきた。

資料8 「アート批評を書こう!」の学習シート2

- 1 パフォーマンス課題として位置付けた「アート批評を書く」最後の段階で使用される学習シートである。
- 2 右のモデルを配付し、これまでの各段階で使用した学習シートを見ながら、論理的な文章構成でアート批評を記述する。
- 3 全員がアート批評を書いた後、ICTを活用して生徒が選んだアート作品と批評文が見られるようにし、相互に発表・批評し合う。

「アート批評」を書こう! — アート批評」を書いてみる! —

むすび	ま と め	な か	は じ め
<p>「自分の生き方・考え」を軸として、アーティストの生き方・考えと対比し、批評文を書く。</p>	<p>「アート批評」の書き方について、具体的な書き方を提示する。</p>	<p>「アート批評」の書き方について、具体的な書き方を提示する。</p>	<p>「アート批評」の書き方について、具体的な書き方を提示する。</p>

「アート批評」を書いてみる! — アート批評」を書いてみる! —

若沖「老松白眉図」動植物絵巻 を読み解く